

博士論文（要約）

論文題目 「日書」の展開と中国古代の社会

氏名 海老根 量介

目次

序章.....	1
第1節 中国における出土文字資料の発見と「日書」.....	1
第2節 「日書」研究を振り返って.....	2
第3節 「日書」と地域社会、国家の関わりについて.....	6
第4節 本論文の構成.....	10
第5節 凡例.....	12
第1章 放馬灘秦簡の抄写年代について.....	15
はじめに.....	15
第1節 「臯」と「罪」.....	17
第2節 「黔首」.....	18
第3節 「毆」と「也」.....	25
おわりに.....	27
第2章 「盗者」篇から見た「日書」の流通過程試論.....	29
はじめに.....	29
第1節 放馬灘秦簡『日書』の「盗者」篇について.....	30
第2節 放馬灘「盗者」篇と睡虎地「盗者」篇の比較.....	39
第3節 睡虎地「盗者」篇の成り立ち.....	42
第4節 放馬灘「盗者」篇の由来と「盗者」篇の流通過程.....	44
おわりに.....	46
第3章 放馬灘秦簡を中心に見た「日書」の流通.....	49
はじめに.....	49
第1節 「丹」篇の分析.....	49
第2節 「鐘律式占」の分析.....	56
第3節 「地支行忌」篇の分析.....	60
第4節 「日書」の流通と受容について.....	62
おわりに.....	65
第4章 「日書」に反映された地域性と階層性——九店楚簡『日書』・放馬灘秦簡『日書』 の比較を通して——.....	67
はじめに.....	67
第1節 分析の手法と分析結果.....	68
第2節 九店楚簡『日書』に見える語句の分析.....	72
第3節 放馬灘秦簡『日書』に見える語句の分析.....	77
第4節 「作大事」について.....	82
おわりに.....	86

第5章 申の復国問題を中心に見た春秋戦国交替期の楚の統治システム	90
はじめに	90
第1節 申の所在地と存続をめぐる先行研究	92
第2節 申の復国について	96
第3節 申国地理考	100
第4節 申の復国及び申国・申県並存の意味	110
おわりに	117
第6章 楚地における「日書」の受容とその展開	119
はじめに	119
第1節 九店56号墓の墓主について	119
第2節 九店楚簡『日書』と墓主の関係	129
第3節 楚の「日書」の起源について	130
第4節 九店楚簡『日書』に見える「経」と「説」	137
おわりに	142
第7章 放馬灘秦簡から見た秦における「日書」の利用について	144
はじめに	144
第1節 放馬灘秦簡『日書』の構成	144
第2節 同出資料から見た放馬灘秦簡『日書』の性質	147
第3節 「丹」篇から見た「日書」の利用方法	151
第4節 「鐘律式占」から見た「日書」の利用方法	154
第5節 「置室門」篇から見た「日書」の利用方法	157
第6節 放馬灘秦簡『日書』から分かる「日書」の性質について	159
おわりに	162
第8章 秦～前漢前半期の「日書」と地域社会	165
はじめに	165
第1節 旧楚地における「日書」の受容	165
第2節 「日書」中に見える官吏の職務	175
第3節 「日書」と官吏及び社会との関わりについて	179
第4節 官吏と文字知識	186
第5節 「日書」の利用者とその社会における役割	191
おわりに	195
結論	198
参考文献一覧	204

本文

博士論文本文は 5 年以内に単行本として出版予定。

参考文献一覧

日本語 (50音順)

- ・安倍道子「春秋時代の楚の王権について——荘王から靈王の時代——」(『史学』50、1980年11月)
- ・安倍道子「荘王期における楚の対外発展——この時期の王権強化の動きとの関連に注目しながら——」(『東海大学紀要文学部』36、1982年3月)
- ・安倍道子「春秋時代の楚の賦に関する一考察——『左傳』襄公二五年の蔦掩による「庀賦數甲兵」をめぐって——」(『東海大学紀要文学部』38、1983年3月)
- ・安倍道子「春秋楚国の申県・陳県・蔡県をめぐって」(『東海大学紀要文学部』41、1984年12月)
- ・安倍道子「楚の申県の変容をめぐって」(慶應義塾大学東洋史研究室編『西と東と 前嶋信次先生追悼論文集』汲古書院、1985年)
- ・晏昌貴(森和訳)「甘肅天水放馬灘木板地図新探」(『日本秦漢史研究』15、2015年3月)
- ・池澤優「子彈庫楚帛書八行文訳註」(郭店楚簡研究会編『楚地出土資料と中国古代文化』汲古書院、2002年)
- ・池澤優「戦国時代の祖先祭祀——「卜筮祭禱記録」楚簡と睡虎地秦簡「日書」(同氏『「孝」思想の宗教学的的研究 古代中国における祖先崇拜の思想的発展』東京大学出版会、2002年)
- ・池澤優「子彈庫楚帛書辺文訳註」(『東京大学宗教学年報』21、2004年3月)
- ・池澤優「甘肅省天水放馬灘一号秦墓「志怪故事」註記」(谷中信一編『出土資料と漢字文化圏』汲古書院、2011年)
- ・池澤優「本邦初の『日書』と卜筮祭禱簡に関する包括的概説書」(『東方』376、2012年6月)
- ・池田知久「出土資料による新たな中国古代史研究の試み——工藤元男『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』を読んで——」(『創文』403、1998年10月)
- ・池田知久「睡虎地『語書』と『淮南子』齊俗篇——「風俗」を繞る中央集権と地方分権——」(『東洋の思想と宗教』31、2014年3月)
- ・池田雄一「中国古代の律令と習俗」(『東方学』121、2010年1月)
- ・池田雄一「秦漢時代の日書と吏人」(『中国の歴史と地理』3、特集「漢代を遡る奏瀨—中国古代の裁判記録—」、2014年7月)
- ・エノ・ギーレ「古代の識字能力を如何に判定するのか—漢代行政文書の事例研究—」(高田時雄編『漢字文化三千年』臨川書店、2009年)
- ・海老根量介「戦国『日書』に反映された地域性と階層性——九店楚簡『日書』・放馬灘秦簡『日書』の比較を通して——」(『中国出土資料研究』14、2010年3月)
- ・海老根量介「天水(甘肅省)」(中国出土資料学会編『地下からの贈り物 新出土資料が語

るいにしえの中国』東方書店、2014年)

- ・海老根量介「孫占宇著『天水放馬灘秦簡集釈』」(『東洋学報』95-4、2014年3月)
- ・海老根量介「上博楚簡『靈王遂申』訳注」(『出土文献と秦楚文化』7、2014年3月)
- ・海老根量介「上博楚簡『平王與王子木』訳注」(『出土文献と秦楚文化』8、2015年3月)
- ・江村治樹「戦国三晋諸国の都市の機構と住民の性格」(同氏『春秋戦国秦漢時代出土文字資料の研究』汲古書院、2000年)
- ・大櫛敦弘「工藤元男著『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』」(『東洋史研究』58-1、1999年6月)
- ・大西克也「「毆」「也」の交替——六国統一前後に於ける書面言語の一側面——」(『中国出土資料研究』2、1998年3月)
- ・大西克也「古代漢語における地域的差異と相互交流——秦楚の出土資料を中心に——」(『長江流域文化研究所年報』2、2003年10月)
- ・大西克也「戦国時代の文字と言葉——秦・楚の違いを中心に——」(長江流域文化研究所編『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』(雄山閣、2006年)
- ・大西克也「史書とは何か——英蔵敦煌漢簡及び秦漢楚地域出土資料を中心として——」(『出土文献と秦楚文化』5、2010年3月)
- ・大西克也「秦の文字統一について」(渡邊義浩編『第四回日中学者中国古代史論壇論文集 中国新出資料学の展開』汲古書院、2013年)
- ・大西克也「嶽麓書院秦簡をめぐって—赤外線スキャンと『占夢書』—」(『書法漢学研究』15、2014年7月)
- ・大西克也「「非發掘簡」を扱うために」(『出土文献と秦楚文化』8、2015年3月)
- ・大西克也「清華簡『繫年』の地域性に関する試論—文字学の視点から」(『資料学の方法を探る』14、2015年3月)
- ・大野裕司「阜陽漢簡『周易』の筮辞と卜辞」(『中国哲学』37、2009年11月)
- ・大野裕司『戦国秦漢出土術数文献の基礎的研究』(北海道大学出版会、2014年)
- ・大野裕司「睡虎地秦簡『日書』における神霊と時の禁忌」(同氏『戦国秦漢出土術数文献の基礎的研究』北海道大学出版会、2014年)
- ・大野裕司「『日書』における禹歩と五画地の出行儀式」(同氏『戦国秦漢出土術数文献の基礎的研究』北海道大学出版会、2014年)
- ・岡田功「楚国と呉起変法——楚国の国家構造把握のために——」(『歴史学研究』490、1981年3月)
- ・小倉芳彦「ぼくの左伝研究とアジア・フォード問題」(『歴史評論』1963-5、1963年5月)
- ・小倉芳彦『中国古代政治思想研究』(青木書店、1970年)
- ・金谷治『易の話』(講談社、1972年)
- ・紙屋正和「前漢前半期における郡・国の職掌と二千石の任用」(同氏『漢時代における郡県制の展開』朋友書店、2009年)

- ・工藤元男『中国古代文明の謎』（光文社、1988年）
- ・工藤元男「睡虎地秦簡「日書」における病因論と鬼神の関係について」（『東方学』88、1994年7月）
- ・工藤元男『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』（創文社、1998年）
- ・工藤元男「建除よりみた「日書」の成立過程試論」（『中国—社会と文化』16、2001年6月）
- ・工藤元男「祭祀儀礼より見た戦国楚の王権と世族・封君一主として「卜筮祭祷簡」・「日書」による一」（『歴史学研究』768増刊号、2002年10月）
- ・工藤元男「平夜君成楚簡「卜筮祭祷簡」初探——戦国楚の祭祀儀礼——」（『長江流域文化研究所年報』3、2005年1月）
- ・工藤元男「序文—長江流域の地域文化論をめぐって—」（長江流域文化研究所編『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』雄山閣、2006年。のち同氏『秦簡・楚簡よりみた中国古代の地域文化の研究』（平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書、2008年5月）に再録）
- ・工藤元男「九店楚簡「告武夷」篇からみた「日書」の成立」（記念論集刊行会編『福井重雅先生古稀・退職記念論集 古代東アジアの社会と文化』汲古書院、2007年）
- ・工藤元男「中国古代の「日書」にみえる時間と占ト——田律の分析を中心として——」（『メトロポリタン史学』5、2009年12月）
- ・工藤元男『占いと中国古代の社会 発掘された古文書が語る』（東方書店、2011年）
- ・工藤元男「具注暦の淵源——「日書」・「視日」・「質日」の間——」（『東洋史研究』72-2、2013年9月）
- ・工藤元男「「日書」の史料性格について——質日・視日との関連を中心として——」（渡邊義浩編『第四回日中学者中国古代史論壇論文集 中国新出資料学の展開』汲古書院、2013年）
- ・工藤元男「「視日」再考」（新川登亀男編『仏教文明と世俗秩序—国家・社会・聖地の形成—』勉誠出版、2015年）
- ・小林文治「里耶秦簡よりみた秦の辺境経営」（『史観』170、2014年3月）
- ・齊藤道子「鬼を哭かせたもの—巫の地位の変容から見る中国・戦国期以降の文字文化の浸透—」（『東海史学』45、2011年3月）
- ・佐藤三千夫「楚墓についての一考察」（『茅茨』創刊号、1985年4月）
- ・佐原康夫「漢代の市」（同氏『漢代都市機構の研究』汲古書院、2002年）
- ・鈴木直美「鳳凰山一〇号漢墓出土史料から見た江陵社会」（『駿台史学』80、1990年10月）
- ・高戸聰「「日書」に見える巫と狂との関係について」（『日本中国学会報』66、2014年10月）
- ・鷹取祐司「里耶秦簡に見える秦人の存在形態」（『資料学の方法を探る』12、2013年3月）
- ・鷹取祐司『秦漢官文書の基礎的研究』（汲古書院、2015年）

- ・高村武幸「九店楚簡日書の性格について—睡虎地日書・放馬灘日書との比較を通じて—」
（『明大アジア史論集』3、1998年3月）
- ・高村武幸「漢代官吏の資格からみた漢代社会の性質」（同氏『漢代の地方官吏と地域社会』
汲古書院、2008年）
- ・高村武幸「漢代の官吏任用と文字の知識」（同氏『漢代の地方官吏と地域社会』汲古書院、
2008年）
- ・高村武幸「漢代文書行政における書信の位置付け」（『東洋学報』91-1、2009年6月）
- ・高村武幸「秦代遷陵県の覚え書」（『名古屋大学東洋史研究報告』39、2015年3月）
- ・高村武幸「中国古代文書行政における書信利用の濫觴」（『駿台史学』154、2015年3月）
- ・谷口満「靈王弑逆事件前後——古代楚国の分解（その二）——」（『史流』23、1982年3
月）
- ・谷口満「春秋楚県試論——新県邑の創設およびその行方——」（『人文論究』47、1987年
3月）
- ・谷口満「江陵紀南城考——楚郢都の始建と変遷——」（『東北大学東洋史論集』3、1988年
1月）
- ・谷口満「虎座鳥架鼓の彼方——戦国楚文化の淵源——」（『東北学院大学論集—歴史学・地
理学』32、1999年9月）
- ・谷口満「紀南城考古知見の再検討——楚都郢の位置問題——」（『東北大学東洋史論集』9、
2003年1月）
- ・谷口義介『中国古代社会史研究』（朋友書店、1988年）
- ・陳偉（森和・工藤元男訳）「岳麓書院秦簡「質日」初歩研究」（『中国出土資料研究』16、
2012年3月）
- ・土口史記「包山楚簡の宐と宐大夫——戦国楚の行政単位と「郡県」」（同氏『先秦時代の領
域支配』京都大学学術出版会、2011年）
- ・土口史記「里耶秦簡にみる秦代県下の官制構造」（『東洋史研究』73-4、2015年3月）
- ・富谷至「漢簡」（滋賀秀三編『中国法制史—基本資料の研究』東京大学出版会、1993年）
- ・富谷至『木簡・竹簡の語る中国古代 書記の文化史』（岩波書店、2003年）
- ・富谷至「江陵張家山二四七号墓出土竹簡——とくに「二年律令」に関して——」（『木簡研
究』27、2005年11月）
- ・富谷至「書記官への道——漢代下級官吏の文字習得」（高田時雄編『漢字文化三千年』臨
川書店、2009年）
- ・仲山茂「漢代の掾史」（『史林』81-4、1998年7月）
- ・仲山茂「漢代における長吏と属吏のあいだ—文書制度の観点から—」（『日本秦漢史学会会
報』3、2002年10月）
- ・奈良竜一「「日書」の性格と郷里社会」（『専修史学』60、2016年3月）
- ・西嶋定生『中国古代帝国の形成と構造』（東京大学出版会、1961年）

- ・濱川栄「秦・漢時代の庶民の識字」(『史滴』35、2013年12月)
- ・東晋次「後漢初期の巫者の反乱について」(『名古屋大学東洋史研究報告』25、2001年3月)
- ・平勢隆郎「楚王と県君」(『史学雑誌』90-2、1981年2月)
- ・平勢隆郎「楚国世族の邑管領と呉起変法」(史学会第80回大会報告記事、『史学雑誌』91-12、1982年12月)
- ・平勢隆郎「趙孟とその集団成員の「室」——兼ねて侯馬盟書を検討する——」(『東洋文化研究所紀要』98、1985年10月)
- ・平勢隆郎「『左傳』昭公十三年「靈王遷許胡沈道房申於荊焉」をめぐって——対楚従属国の遷徙問題——」(『東洋史研究』46-3、1987年12月)
- ・平勢隆郎編『春秋晋国『侯馬盟書』字体通覧—山西省出土文字資料—』(東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、1988年)
- ・平勢隆郎「淀江町出土弥生土器の線刻羽人に類似する中国西南地区の「銅鼓」所刻羽人について」(『大山をとりまく自然環境と地域文化に関する総合的研究』昭和62年度教育研究学内特別経費報告書、鳥取大学教育学部、1988年3月)
- ・平勢隆郎『新編史記東周年表——中国古代紀年の研究序章——』(東京大学出版会、1995年)
- ・平勢隆郎『左伝の史料批判的研究』(汲古書院、1998年)
- ・平勢隆郎『都市国家から中華へ 殷周 春秋戦国』(中国の歴史02、講談社、2005年)
- ・平勢隆郎『八紘とは何か』(汲古書院、2012年)
- ・平勢隆郎「遊侠の「儒」化とは何か——豪族石碑出現の背景——」(同氏『八紘とは何か』汲古書院、2012年)
- ・廣瀬薫雄「包山楚簡『所誼』分析」(『郭店楚簡の思想史的研究』5、2001年2月)
- ・廣瀬薫雄「『晋書』刑法志に見える法典編纂説話について」(同氏『秦漢律令研究』汲古書院、2010年)
- ・廣瀬薫雄「秦代の令について」(同氏『秦漢律令研究』汲古書院、2010年)
- ・藤田勝久「包山楚簡にみえる戦国楚の県と封邑」(同氏『中国古代国家と郡県社会』汲古書院、2005年)
- ・藤田勝久「戦国秦の領域形成と交通路」(同氏『中国古代国家と郡県社会』汲古書院、2005年)
- ・藤田勝久『中国古代国家と社会システム——長江流域出土資料の研究』(汲古書院、2009年)
- ・増淵龍夫「漢代における民間秩序の構造と任侠的習俗」(同氏『新版 中国古代の社会と国家』岩波書店、1996年)
- ・増淵龍夫「漢代における巫と侠」(同氏『新版 中国古代の社会と国家』岩波書店、1996年)

- ・増淵龍夫「先秦時代の封建と郡県」(同氏『新版 中国古代の社会と国家』岩波書店、1996年)
- ・間瀬収芳「雲夢睡虎地秦漢墓被葬者の出自について」(『東洋史研究』41-2、1982年9月)
- ・松崎つね子「楚・秦・漢墓の変遷より秦の統一をみる一頭向・葬式・墓葬構造等を通じて一」(唐代史研究会編『東アジア史における国家と地域』刀水書房、1999年)
- ・松丸道雄「西周青銅器製作の背景——周金文研究・序章——」(同氏編『西周青銅器とその国家』東京大学出版会、1980年)
- ・松本光雄「中国古代の邑と民・人との関係」(『山梨大学学芸学部研究報告』3、1952年9月)
- ・三浦國雄「通書『玉匣記』初探」(『人文学報』86、2002年3月)
- ・水間大輔「秦律から漢律への継承と変革——睡虎地秦簡・龍崗秦簡・張家山漢簡の比較を中心として——」(『中国出土資料研究』10、2006年3月)
- ・水間大輔「秦・漢の亭吏及び他官との関係」(『中国出土資料研究』13、2009年3月)
- ・村上陽子「穀物の良日・忌日」(『明大アジア史論集』3、1998年3月)
- ・靱山明「秦漢時代の刑事訴訟」(同氏『中国古代訴訟制度の研究』京都大学学術出版会、2006年)
- ・靱山明「司法経験の再分配」(同氏『中国古代訴訟制度の研究』京都大学学術出版会、2006年)
- ・森和「子弹庫楚帛書三篇の関係からみた資料的性格について」(『史観』26、2004年12月)
- ・森和「子弹庫楚帛書の資料的性格について——占書と暦——」(『長江流域文化研究所年報』3、2005年1月)
- ・森和「戦国楚における宜忌の論理——子弹庫楚帛書三篇の関係を例に一」(長江流域文化研究所編『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』雄山閣、2006年)
- ・森和「『日書』と中国古代史研究——時称と時制の問題を例に一」(『史滴』30、2008年12月)
- ・森和「離日と反支日からみる『日書』の継承関係」(工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』雄山閣、2009年)
- ・守屋美都雄「父老」(同氏『中国古代の家族と国家』東洋史研究会、1968年)
- ・谷中信一『『老子』経典化過程の研究』(汲古書院、2015年)
- ・山田勝芳「境界の官吏——中国古代における冥界への仲介者——」(『歴史』83、1994年9月)
- ・湯浅邦弘『竹簡学——中国古代思想の探究——』(大阪大学出版会、2014年)
- ・横田恭三「前漢墓出土「告地策」考」(『書学書道史研究』23、2013年)
- ・李承律『『唐虞之道』の社会的利思想』(同氏『郭店楚簡儒教の研究——儒系三篇を中心に——』汲古書院、2007年)
- ・劉楽賢(廣瀬薫雄訳)「出土文献から見た楚と秦の選択術の異同と影響——楚系選択術中の「危」字の解釈を兼ねて」(渡邊義浩編『両漢における易と三礼』汲古書院、2006年)

中国語（ピンイン順）

- ・艾延丁「申国之謎之我見」（『中原文物』1987-3、1987年9月）
- ・安徽省文物工作隊・阜陽地区博物館・阜陽県文化局「阜陽双古堆西漢汝陰侯墓發掘簡報」（『文物』1978-8、1978年8月）
- ・北京大学出土文献研究所「北京大学藏秦簡牘概述」（『文物』2012-6、2012年6月）
- ・北京大学出土文献研究所編『北京大学藏西漢竹書〔貳〕』（上海古籍出版社、2012年）
- ・邴尚白「九店五十六号楚墓一至十二簡試探」（『中国文学研究』16、2002年6月）
- ・曹方向「上博九《靈王遂申》通釈」（簡帛網、2013年1月6日、http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=1772）
- ・曹旅寧「秦簡所載魏律論考」（同氏『秦律新探』中国社会科学出版社、2002年）
- ・曹婉如「有關天水放馬灘秦墓出土地圖的幾個問題」（『文物』1989-12、1989年12月）
- ・晁福林「《九店楚簡》補釈——小議戰國時期楚国田畝制度」（『中原文物』2002-5、2002年）
- ・陳侃理「放馬灘秦簡《丹》篇割記」（簡帛網、2012年9月25日、http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=1740）
- ・陳侃理「秦簡牘復生故事与移風易俗」（武漢大学簡帛研究中心主弁『簡帛』第8輯、上海古籍出版社、2013年）
- ・陳侃理「睡虎地秦簡“爲吏之道”應更名“語書”——兼談“語書”名義及秦簡中類似文献的性質」（清華大学出土文献研究与保護中心編『出土文献』第6輯、中西書局、2015年）
- ・陳槃『春秋大事表列国爵姓及存滅表誤異（三訂本）』（中央研究院歷史語言研究所、1969年）
- ・陳松長編『香港中文大学文物館藏簡牘』（香港中文大学文物館、2001年）
- ・陳松長「岳麓書院所藏秦簡綜述」（『文物』2009-3、2009年3月）
- ・陳偉「春秋時期的附庸」（『武漢大学学报（哲学社会科学版）』1996-2、1996年3月）
- ・陳偉『包山楚簡初探』（武漢大学出版社、1996年）
- ・陳偉「新發表楚簡資料所見的記時制度」（『第三屆國際中国古文字学研討会論文集』香港中文大学・中国文化研究所・中国語言及文学系、1997年）
- ・陳偉「九店楚日書校讀及其相關問題」（馮天瑜主編『人文論叢』1998年卷、武漢大学出版社、1998年）
- ・陳偉「睡虎地日書《良山》試讀」（『中国出土資料研究』6、2002年3月）
- ・陳偉「《昭王毀室》等三篇竹書的幾個問題」（中国文物研究所編『出土文献研究』第7輯、上海古籍出版社、2005年）
- ・陳偉主編『里耶秦簡牘校釈（第1卷）』（武漢大学出版社、2012年）
- ・陳昭容「從秦系文字演變的觀點論《詛楚文》的真偽及其相關問題」（『中央研究院歷史語言研究所集刊』62-4、1993年4月）
- ・陳治国「從里耶秦簡看秦的公文制度」（『中国歷史文物』2007-1、2007年1月）

- 程少軒「六十甲子衰分数術考」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心編『出土文獻與古文字研究』第4輯、上海古籍出版社、2011年）
- 程少軒『放馬灘簡式占古佚書研究』（復旦大學博士論文、2011年）
- 程少軒「放馬灘簡所見生律法補說」（『天津音樂學院學報』2011-4、2011年）
- 程少軒「周家台秦簡《日書》與《卅六年日》編聯補說」（武漢大學簡帛研究中心主弁『簡帛』第8輯、上海古籍出版社、2013年）
- 程少軒「放馬灘簡《星度》新研」（『自然科學史研究』2014-1、2014年）
- 崔慶明「南陽市北郊出土一批中國青銅器」（『中原文物』1984-4、1984年12月）
- 大西克也「上博六《平王》兩篇故事中的幾個問題」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心網站、2010年4月21日、<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Web/Show/1133>）
- 大西克也「放馬灘秦簡中用字的幾個特點」（東吳大學中國文學系·中國文字學會主編『第二十一屆中國文字學國際學術研討會論文集』東吳大學、2010年）
- 大西克也「從里耶秦簡和秦封泥探討“泰”字的造字意義」（武漢大學簡帛研究中心主弁『簡帛』第8輯、上海古籍出版社、2013年）
- 戴念祖「秦簡《律書》的樂律與占卜」（『文物』2002-1、2002年1月）
- 董全生·李長周「南陽市物資城一號墓及其相關問題」（『中原文物』2004-2、2004年4月）
- 董珊「楚簡簿記與楚國量制研究」（『考古學報』2010-2、2010年。のち一部修正して復旦大學出土文獻與古文字研究中心網站、2010年6月6日、<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Web/Show/1175>に轉載）
- 董珊「救秦戎銅器群的解讀」（『江漢考古』2012-3、2012年9月）
- 方勇「讀《岳麓書院藏秦簡（三）》小札一則」（簡帛網、2013年12月22日、http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=1967）
- 復旦大學出土文獻與古文字研究中心研究生讀書會「天水放馬灘秦簡《日書·盜篇》研讀」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心網站、2009年10月24日、<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Web/Show/951>）
- 甘肅省文物考古研究所編『天水放馬灘秦簡』（中華書局、2009年）
- 甘肅省文物考古研究所·天水市北道區文化館「甘肅天水放馬灘戰國秦漢墓群的發掘」（『文物』1989-2、1989年2月）
- 工藤元男「從卜筮祭禱簡看“日書”的形成」（武漢大學中國文化研究院編『郭店楚簡國際學術研討會論文集』湖北人民出版社、2000年）
- 谷傑「從放馬灘秦簡《律書》再論《呂氏春秋》生律次序」（『音樂研究』2005-3、2005年）
- 顧頡剛「春秋時代的梟」（『禹貢半月刊』7-6·7、1937年6月）
- 顧鐵符「信陽一號楚墓的地望與人物」（『故宮博物院院刊』1979-2、1979年5月）
- 國家文物局古文獻研究室編『馬王堆漢墓帛書〔壹〕』（文物出版社、1980年）
- 何光岳『楚滅國考』（上海人民出版社、1990年）
- 何浩『楚滅國研究』（武漢出版社、1989年）

- 何双全「天水放馬灘秦墓出土地區初探」(『文物』1989-2、1989年2月)
- 何双全「天水放馬灘秦簡綜述」(『文物』1989-2、1989年2月)
- 何双全「天水放馬灘秦簡甲種《日書》考述」(甘肅省文物考古研究所編『秦漢簡牘論文集』甘肅人民出版社、1989年)
- 河北省文物研究所「河北定興40號漢墓發掘簡報」(『文物』1981-8、1981年8月)
- 賀潤坤「從《日書》看秦國的穀物種植」(『文博』1988-3、1988年)
- 賀潤坤「從雲夢秦簡《日書》看秦國的六畜飼養業」(『文博』1989-6、1989年)
- 賀潤坤「從雲夢秦簡《日書》看秦國的農業水利等有關狀況」(『江漢考古』1992-4、1992年)
- 賀潤坤「雲夢秦簡《日書》所反映秦人的衣食狀況」(『江漢考古』1996-4、1996年)
- 賀潤坤「從雲夢秦簡看秦社會有關捕盜概況」(李學勤·謝桂華主編『簡帛研究』第3輯、廣西教育出版社、1998年)
- 胡平生·李天虹『長江流域出土簡牘與研究』(湖北教育出版社、2004年)
- 胡文輝「放馬灘《日書》小考」(同氏『中國早期方術與文獻叢考』中山大學出版社、2000年)
- 「湖北荊州劉家台與夏家台墓地發現大批戰國墓葬」(『中國文物報』2016年4月8日)
- 湖北省博物館編『曾侯乙墓』(文物出版社、1989年)
- 湖北省江陵縣文物局·荊州地區博物館「江陵岳山秦漢墓」(『考古學報』2000-4、2000年10月)
- 湖北省荊州博物館編著『荊州高台秦漢墓』(科學出版社、2000年)
- 湖北省荊州市周梁玉橋遺址博物館編『關沮秦漢墓簡牘』(中華書局、2001年)
- 湖北省文物考古研究所編著『江陵九店東周墓』(科學出版社、1995年)
- 湖北省文物考古研究所·北京大學中文系編『九店楚簡』(中華書局、2000年)
- 湖北省文物考古研究所·隨州市考古隊編著『隨州孔家坡漢墓簡牘』(文物出版社、2006年)
- 湖北省文物考古研究所·雲夢縣博物館「湖北雲夢睡虎地M77發掘簡報」(『江漢考古』2008-4、2008年)
- 湖南省文物考古研究所編著『里耶秦簡〔壹〕』(文物出版社、2012年)
- 湖南省文物考古研究所·懷化市文物處·沅陵縣博物館「沅陵虎溪山一號漢墓發掘簡報」(『文物』2003-1、2003年1月)
- 黃傑「放馬灘秦簡《丹》篇與北大秦簡《泰原有死者》研究」(簡帛網、2014年10月14日、http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=2085)
- 黃儒宣『《日書》圖像研究』(中西書局、2013年)
- 黃錫全「申文王之孫州奉簠銘文及相關問題」(中國古文字研究會·浙江省文物考古研究所編『古文字研究』第25輯、中華書局、2004年)
- 姜守誠「放馬灘秦簡《志怪故事》考釋」(楊振紅·鄔文玲主編『簡帛研究2014』廣西師範大學出版社、2014年)

- 蒋礼鴻『義府統詔』（中華書局、1981年）
- 荊州地区博物館「江陵張家山三座漢墓出土大批竹簡」（『文物』1985-1、1985年1月）
- 荊州地区博物館「江陵張家山兩座漢墓出土大批竹簡」（『文物』1992-9、1992年9月）
- 荊州地区博物館「江陵王家台15號秦墓」（『文物』1995-1、1995年1月）
- 李家浩「睡虎地秦簡《日書》「楚除」的性質及其他」（『中央研究院歷史語言研究所集刊』70-4、1999年12月）
- 李家浩「五十六號墓積文與考釋」（湖北省文物考古研究所·北京大學中文系編『九店楚簡』中華書局、2000年）
- 李零「讀九店楚簡」（『考古學報』1999-2、1999年4月）
- 李零『中國方術正考』（中華書局、2006年）
- 李零『簡帛古書與學術源流』（生活·讀書·新知三聯書店、2007年）
- 李零「視日·日書和葉書——三種簡帛文獻的區別和定名」（『文物』2008-12、2008年12月）
- 李零「北大漢簡中的數術書」（『文物』2011-6、2011年6月）
- 李零「北大秦牘《泰原有死者》簡介」（『文物』2012-6、2012年6月）
- 李榮「漢字演變的幾個趨勢」（『中國語文』1980-1、1980年）
- 李守奎編著『楚文字編』（華東師範大學出版社、2003年）
- 李守奎·曲冰·孫偉龍編著『上海博物館藏戰國楚竹書（一一五）文字編』（作家出版社、2007年）
- 李學勤「新出簡帛與楚文化」（湖北省社會科學院歷史研究院編『楚文化新探』湖北人民出版社、1981年）
- 李學勤「論仲冉父簋與申國」（『中原文物』1984-4、1984年12月）
- 李學勤「睡虎地秦簡《日書》與楚·秦社會」（『江漢考古』1985-4、1985年11月）
- 李學勤「放馬灘簡中的志怪故事」（『文物』1990-4、1990年4月）
- 李學勤「睡虎地秦簡中的《良山圖》」（『文物天地』1991-4、1991年）
- 李學勤「《日書》盜者章研究」（同氏『簡帛佚籍與學術史』江西教育出版社、2001年）
- 李學勤「有紀年楚簡年代的研究」（同氏『文物中的古文明』商務印書館、2008年）
- 李學勤「清華簡《繫年》及有關古史問題」（『文物』2011-3、2011年3月）
- 連劭名「江陵張家山漢簡《脈書》初探」（『文物』1989-7、1989年7月）
- 劉剛「清華叁《良臣》為具有晉系文字風格的抄本補証」（復旦大學出土文獻與古文字研究中心網站、2013年1月10日、<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Web/Show/2002>）
- 劉樂賢『睡虎地秦簡日書研究』（文津出版社、1994年）
- 劉樂賢「九店楚簡日書研究」（『華學』2、1996年12月）
- 劉樂賢「放馬灘秦簡《日書》甲種初探」（同氏『簡帛數術文獻探論』湖北教育出版社、2003年）
- 劉樂賢「楚秦選摺術的異同及影響——以出土文獻為中心」（『歷史研究』2006-6、2006年12月）

月)

- 劉信芳「九店楚簡日書与秦簡日書比較研究」(『第三屆國際中國古文字學研討會論文集』香港中文大學·中國文化研究所·中國語言及文學系、1997年)
- 劉信芳·梁柱編著『雲夢龍崗秦簡』(科學出版社、1997年)
- 呂靜『春秋時期盟誓研究——神靈崇拜下的社會秩序再構建』(上海古籍出版社、2007年)
- 「馬承源先生談上博簡」(上海大學古代文明研究中心·清華大學思想文化研究所編『上博館戰國楚竹書研究』上海書店、2002年)
- 馬繼興·李學勤「我國現已發現的最古醫方——帛書《五十二病方》」(『文物』1975-9、1975年9月)
- 蒙文通「周秦少數民族研究」(『古族甄微』巴蜀書社、1993年)
- 南陽市文物考古研究所「河南南陽春秋楚彭射墓發掘簡報」(『文物』2011-3、2011年3月)
- 彭浩·陳偉·工藤元男主編『二年律令与奏讞書：張家山二四七號漢墓出土法律文獻積讀』(上海古籍出版社、2007年)
- 駢宇騫·段書安編著『二十世紀出土簡帛綜述』(文物出版社、2006年)
- 蒲慕州「《日書》与《山海經》所見戰國末年之民間信仰」(同氏『追尋一己之福——中國古代的信仰世界』上海古籍出版社、2007年)
- 喬保同「最新考古發現：南陽楚彭氏家族墓」(『文史知識』2009-6、2009年6月)
- 清華大學出土文獻研究与保護中心編『清華大學藏戰國竹簡(貳)』(中西書局、2011年)
- 裘錫圭『文字學概要』(商務印書館、1988年)
- 裘錫圭·李家浩「曾侯乙墓鐘·磬銘文積文与考釈」(湖北省博物館編『曾侯乙墓』文物出版社、1989年)
- 屈卡樂「天水放馬灘木板地圖新釈」(『自然科學史研究』32-4、2013年)
- 饒宗頤「雲夢秦簡日書研究」(饒宗頤·曾憲通『雲夢秦簡日書研究』中山大學出版社、1982年。のち饒宗頤·曾憲通『楚地出土文獻三種研究』(中華書局、1993年)に収録)
- 《日書》研讀班「日書：秦國社會的一面鏡子」(『文博』1986-5、1986年9月。のち吳小強『秦簡日書集釈』(岳麓書社、2000年)に収録)
- 山西省文物工作委員會編『侯馬盟書』(增訂本、山西古籍出版社、2006年)
- 邵學海「虎座飛鳥是楚巫躡与巴巫躡的重祖」(『江漢考古』1997-2、1997年6月)
- 石泉『古代荊楚地理新探』(武漢大學出版社、1988年)
- 施謝捷「簡帛文字考釈札記」(李學勤·謝桂華主編『簡帛研究』第3輯、廣西教育出版社、1998年)
- 水間大輔「秦漢獄吏考」(中國社會科學院考古研究所·河南省文物考古研究所編『漢代城市和聚落考古与漢文化』科學出版社、2012年)
- 睡虎地秦墓竹簡整理小組編『睡虎地秦墓竹簡』(文物出版社、1990年)
- 宋華強『新蔡葛陵楚簡初探』(武漢大學出版社、2010年)
- 宋華強「放馬灘秦簡《日書》識小録」(武漢大學簡帛研究中心主弁『簡帛』第6輯、上海

- 古籍出版社、2011年)
- 蘇建洲「上博九《靈王遂申》積讀與研究」(李學勤主編『出土文獻』第5輯、中西書局、2014年)
 - 蘇建洲「《清華二·繫年》中的「申」及相關問題討論」(李宗焜主編『古文字與古代史』第4輯、中央研究院歷史語言研究所、2015年)
 - 孫慰祖「“邸丞”弁」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心編『出土文獻與古文字研究』第5輯、上海古籍出版社、2013年)
 - 孫占宇『放馬灘秦簡日書整理與研究』(西北師範大學博士論文、2008年)
 - 孫占宇「放馬灘秦簡乙360—366號“墓主記”說商榷」(『西北師大學報(社會科學版)』2010-5、2010年9月)
 - 孫占宇「放馬灘秦簡日書“星度”篇初探」(『考古』2011-4、2011年)
 - 孫占宇「放馬灘秦簡甲種日書校注」(中國文化遺產研究院編『出土文獻研究』第10輯、中華書局、2011年)
 - 孫占宇「放馬灘秦簡《丹》篇校注」(簡帛網、2012年7月31日、http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=1725)
 - 孫占宇『天水放馬灘秦簡集』(甘肅文化出版社、2013年)
 - 孫重恩「申國弁」(『鄭州大學學報(哲學社會科學版)』1988-5、1988年10月)
 - 譚其驤主編『中國歷史地圖集』第1冊(中國地圖出版社、1982年)
 - 田成方「春秋時期“滌”的分布區域及其人文地理學內涵」(『襄樊學院學報』30-9、2009年9月)
 - 王廣禮·崔慶明「古申國瑣議」(『南都學壇(社會科學版)』1989-4、1989年)
 - 王輝「《天水放馬灘秦簡》校讀記」(武漢大學簡帛研究中心主編『簡帛』第6輯、上海古籍出版社、2011年)
 - 王明欽「試論《歸藏》的幾個問題」(古方·徐良高·唐際根編『一劍集』中國婦女出版社、1996年)
 - 王明欽「王家台秦墓竹簡概述」(艾蘭·邢文編『新出簡帛研究』文物出版社、2004年)
 - 王寧「天水放馬灘秦簡《丹》一處斷句與解釋」(簡帛網、2015年6月5日、http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=2251)
 - 王儒林·崔慶明「南陽市西關出土一批春秋青銅器」(『中原文物』1982-1、1982年3月)
 - 王彥芬「楚方城考」(河南省考古學會編『楚文化研究論文集』中州書畫社、1983年)
 - 王庸『中國地理學史』(商務印書館、1998年)
 - 王子今『睡虎地秦簡《日書》甲種疏證』(湖北教育出版社、2003年)
 - 王子今·李斯「放馬灘秦簡地輿林業交通史料研究」(『中國歷史地理論叢』2013-2、2013年4月)
 - 魏堅主編『額濟納漢簡』(廣西師範大學出版社、2005年)
 - 文物局古文獻研究室·安徽省阜陽地區博物館阜陽漢簡整理組「阜陽漢簡簡介」(『文物』

1983-2、1983年2月)

- 吳小強「《日書》与秦社会風俗」(『文博』1990-2、1990年)
- 吳小強「論秦人宗教思維特徵—雲夢秦簡《日書》的宗教学研究」(『江漢考古』1992-1、1992年)
- 吳小強「秦簡《日書》与秦漢社会的生命意識」(『広州師院学報(社会科学版)』1997-1、1997年)
- 吳小強『秦簡日書集积』(岳麓書社、2000年)
- 武漢大学簡帛研究中心·甘肅簡牘博物館編『秦簡牘合集〔肆〕』(武漢大学出版社、2014年)
- 夏德安「周家台的数術簡」(武漢大学簡帛研究中心主弁『簡帛』第2輯、上海古籍出版社、2007年)
- 蕭聖中『曾侯乙墓竹簡积文補正暨車馬制度研究』(科学出版社、2011年)
- 邢義田「允文允武—漢代官吏的一種典型」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』75-2、2004年6月)
- 邢義田『治国安邦 法制·行政与軍事』(中華書局、2011年)
- 徐少華『周代南土歷史地理与文化』(武漢大学出版社、1994年)
- 晏昌貴「《日書》札記十則」(丁四新主編『楚地出土簡帛文献思想研究(一)』湖北教育出版社、2002年)
- 晏昌貴「放馬灘簡《邸丞謁御史書》中的時間与地点」(清華大学出土文献研究与保護中心編『出土文献』第4輯、中西書局、2013年)
- 晏昌貴「日書“艮山·離日”之試解」(『周易研究』2014-1、2014年)
- 楊伯峻『春秋左伝注』(修訂本、中華書局、1990年)
- 楊寬「春秋時代楚国鼎制的性質問題」(『中国史研究』1981-4、1981年12月)
- 銀雀山漢墓竹簡整理小組編『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』(文物出版社、1985年)
- 雍際春『天水放馬灘木板地図研究』(甘肅人民出版社、2002年)
- 《雲夢睡虎地秦墓》編写組『雲夢睡虎地秦墓』(文物出版社、1981年)
- 張丹『南襄盆地出土兩周時期銘文研究』(武漢大学博士論文、2012年5月)
- 張家山二四七号漢墓竹簡整理小組編『張家山漢墓竹簡〔二四七號墓〕』(文物出版社、2001年)
- 張曉軍·尹俊敏「談与“申”有関的幾個問題」(『中原文物』1992-2、1992年6月)
- 張修桂『中国歷史地貌与古地図研究』(社会科学文献出版社、2006年)
- 張政烺『馬王堆帛書《周易》経伝校讀』(中華書局、2008年)
- 趙平安「戦国文字中的“宛”及其相関問題研究」(同氏『新出簡帛与古文字古文献研究』商務印書館、2009年)
- 鄭曙斌等編著『湖南出土簡牘選編』(岳麓書社、2013年)
- 鄭忠華「印台墓地出土大批西漢簡牘」(荊州博物館編著『荊州重要考古發現』文物出版社、

2009 年)

- 中国社会科学院考古研究所編『居延漢簡甲乙編』(中華書局、1980 年)
- 中国文物研究所・湖北省文物考古研究所編『龍崗秦簡』(中華書局、2001 年)
- 鐘守華「秦簡《天官書》中的中星和古度」(『文物』2005-3、2005 年 3 月)
- 周波「秦漢簡《日書》校讀札記」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心編『出土文獻與傳世典籍的詮釋—紀念譚樸森先生逝世兩週年國際學術研討會論文集』上海古籍出版社、2010 年)
- 周敏華「《睡》簡・《放》簡及《孔》簡之《日書》盜篇比較」(簡帛網、2008 年 4 月 8 日、http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=816)
- 朱漢民・陳松長主編『岳麓書院藏秦簡(壹)～(肆)』(上海辭書出版社、2010～2016 年)
- 祝中熹「對放馬灘地區的新認識」(『隴右文博』2001-2、2001 年)
- 子居「清華簡《系年》12～15 章解析」(Confucius2000 網、2012 年 10 月 2 日)

論文の内容の要旨

論文題目 「日書」の展開と中国古代の社会

氏 名 海老根 量介

近年、中国各地では戦国～秦漢期の出土文字資料が陸続と発見されている。その中でも重要な位置を占めているのが、簡牘という、竹や木の切片に文字を書き記したものである。「日書」と呼ばれる数術関係の資料も、そうした簡牘の一つである。

「日書」は、択日を中心とするさまざまな占いの方法が集められ、雑多な形式で寄せ書きされた書籍であり、現在に至るまで中華圏を中心に幅広く用いられている選択通書にも似た体裁を持つ。このように、「日書」はきわめて実用的かつ通俗的な内容であるため、伝世文献として現在に残っていないのはもちろん、数術書も多く収録している『漢書』芸文志にも、「日書」のようなスタイルの書籍は収められていない。だが、「日書」が人々の日常生活における吉凶や禁忌を占ったものであるとすれば、従来ほとんど知ることのできなかつた当時の人々の暮らしに迫ることのできる貴重な資料となる。

「日書」は、伝世文献中に見える「日者」と呼ばれる占術家に関わる書籍であろうと見なされているが、それがどのようにして「日書」を副葬している墓の主人の手に渡るのか、これまではっきりとした説明がされてこなかった。また、目下のところ「日書」の出土地は旧楚地域に偏っており、時代が下るにつれて全国に広がっていく傾向がある。このような状況を踏まえて、「日書」は戦国期の楚で生まれ、秦の統一を経て漢代には全国へ拡大していったとする説がある。しかし、本当にそのように考えられるのだろうか。そもそも各「日書」は戦国期の楚のもの、秦の故地出土のもの、秦に占領された楚地のもの、漢代のものなど、さまざまな時代・地域のもので発見されており、それらを全て楚から伝播したものとして考

えられるかどうかは疑問である。まずはそれぞれの時代背景や地域性に即した分析がなされるべきであろう。

本論文では、以上のような問題意識に基づき、戦国～秦漢期の代表的な「日書」を取り上げて、その内容を個別に分析することによって、「日書」がそれぞれの時代・地域においてどのように受け入れられていたのか、当時の社会でどのような役割を果たしていたかを考察するものである。

まず第1～3章においては、「日書」の伝播の問題について考える。第1章では、放馬灘秦簡『日書』の基礎的な性格を論じる。先述のように、「日書」の出土地は旧楚地に偏るが、放馬灘秦簡『日書』は数少ない秦の故地出土の「日書」であり、秦地における「日書」の実態を伝えるという点で貴重な資料である。この資料は一般的に戦国秦の抄本とみなされているが、その中に見られる「罪」・「黔首」などの字句は秦の統一後に改められたものであると考えられるため、秦代に抄写されたとしなければならない。また、当該資料は秦の「日書」であるにも関わらず六国の文字遣いも確認されることから、少なくともその一部は六国からもたらされたと考えられる。これらは、「日書」の流通の複雑さを窺わせるとともに、「日書」が時代・地域に即した内容に書き換えられつつ受容されていたことを物語る。

第2章では、放馬灘秦簡『日書』・睡虎地秦簡『日書』・孔家坡漢簡『日書』などに見える「盗者」篇という盗人の捕縛に関する占いに注目し、その相互比較を通じて、この占いが時代・地域を越えてどのように流通していたかを論じる。本章では、「盗者」篇が三晋など中原地域に由来し、それが秦に伝わった後、さらに秦の占領下の旧楚地にももたらされたこと、旧楚地では当地の十二禽に合わせて内容を換骨奪胎され、それが漢代に継承されていくことを推測した。前章で考察したことも合わせると、「日書」は楚を起源とし、秦の統一を経てそれが全国へ広まったと考えられるかは疑問であり、中原からの影響や、各地で同時並行的に編纂されるようになった可能性を考慮しなければならないだろう。

第3章では、放馬灘秦簡『日書』の中から「丹」篇・「鐘律式占」・「地支行忌」篇を取り上げ、それぞれが三晋からもたらされた篇であることを論証し、前章の補足とする。また、「地支行忌」篇に関しては、九店楚簡『日書』にも類似の内容が見られるため、三晋の占法が秦・楚両方に伝播した可能性がある。すると、秦・楚を初めとする「日書」は、中原地域からもたらされた占法に接触することによって在地の宗教的職能者が刺激を受け、その占法を取り込み、時には独自にアレンジしつつ、土着の占法をも組み込むことで、内容が成熟していったと考えられる。

さて、「日書」がこのように中原地域からの影響も受けつつ、秦や楚など各地で同時並行的にまとめられていったものだとしたら、その内容についても、それぞれの地域性を反映した差異がある可能性は想定できないだろうか。そこで第4章では、秦の故地出土の放馬灘秦簡『日書』を秦の「日書」、戦国楚の九店楚簡『日書』を楚の「日書」として設定した上で、それぞれの占辞において吉凶や禁忌が問題とされている具体的行為を分析・比較した。その結果、秦の「日書」は下級官吏層を主な対象とし、県以下のレベルを問題としているの

に対し、楚の「日書」は封君や有力貴族などを対象とし、国家レベルの事柄を主に問題にしており、そもそも対象として想定している層が異なっていたことが判明した。「日書」は、その通俗的な内容や、主に下級官吏などの墓葬から多く見つかることから、先行研究では「民間に流通していた中下層の人々のための書籍」とされることが多いが、少なくとも楚の「日書」については、これは当てはまらないことになる。ではなぜ秦と楚の「日書」にはこのような違いが生じたのだろうか。

まずは楚の「日書」について論じる。楚の「日書」が封君や有力貴族などを対象としているのは、楚の国家制度や社会のあり方を反映しているのではないかという予想が立てられる。そこで第5章では、春秋期に遡って、楚と服属する小国の関係を通じて、楚が国内外に対してどのような秩序を構築していたかを検討する。現在の河南省南陽付近に位置した申国は、春秋前期に楚に滅ぼされ県とされたことが『左傳』に記されるが、新出資料を手掛かりにすると、春秋中期頃に復国されていたらしい。楚は申の公室を復活させて国人層を懐柔し、その軍事力を利用して、その一方で申県を併置することで一定の牽制もしていた。このような諸侯と県を併置するシステムは、戦国期の封君と県の併置関係に受け継がれている。この封君や世族などを対象としていることから、楚の「日書」は春秋戦国交替期の社会の変化を受けて成立してきた可能性がある。

第6章では、九店楚簡『日書』を所持していた九店56号墓の墓主について、同時に出土した第1～12号簡や副葬品をもとに、軍事に関わる下級官吏であったと推測した。ところがこれは第4章で考察した楚の「日書」の本来の対象者と合致していない。すると、楚では貴族層を対象とした内容の「日書」が普及した後、それが下級官吏層にも再利用されていたことになる。また九店楚簡『日書』には抽象的・簡潔な経文と、具体的・平易な説文が見られることから、占術家の専門的なテキスト（経文）が一般向けに解説された（説文）ことが読み取れるが、その契機としては戦国期における巫・祝・史などの集団の解体と、世族の官僚化により、彼らも「日書」のようなマニュアルをもとに自ら占いを行う必要性が増したことが指摘できる。

これに対して秦ではどうだったのだろうか。第7章では、放馬灘秦簡『日書』中の各篇の構造・内容や同時に出土した副葬品を手掛かりに、秦の「日書」はもともと市で客を取る占術家が用いていたマニュアルが、徐々に一般の読者が自分で参照して利用できるような形に変化していったものであることを論じた。このような秦の「日書」のあり方は、秦に占領された旧六国の地にも受容され、それまで貴族層を主な対象とする「日書」が普及していた楚地にも、下級官吏や庶民のための「日書」という概念が持ち込まれた。第8章では、秦～前漢前期の旧楚地の「日書」は、占術家が下級官吏層などのニーズに合わせて内容に少しずつ手を加えながら、質日などとセットにして定期的に配布していたことを明らかにした。これらの「日書」は、人々が日常生活において参照するばかりでなく、当時の県以下の地方行政では、職務遂行に「日書」を活用することを事実上黙認しており、「日書」は官吏にとって非公式ながら準教科書的な存在となっていた。また「日書」所有者の官吏や経済活動によ

り富を蓄えた商人などは、自らが参照するためだけでなく、自分では「日書」を操れない人々をも占断することによって郷里社会の名望を集め、さらに占術家とつながりを結んで広域ネットワークを築くことに成功した。地方社会で下級官吏層や経済活動に従事する者が有力者となっていくのには、「日書」をうまく利用したという側面もあった。

「日書」は一般的に民間の秩序を反映するものと言われているが、楚の「日書」は貴族層を主な対象としていたものであったし、秦・漢において用いられた「日書」は、地方行政とも密接な関わりを持っていた。秦の「日書」が県以下のレベルを対象としていたのは、一つには経済的繁栄を背景に都市の独立性が高かった三晋の影響を受けていることが挙げられるが、もう一つには秦の官吏が地方行政において「日書」を積極的に利用していることとも関係があるだろう。また「日書」は地方社会において名望を集め、広域ネットワークを築くためのツールとしても機能した。後漢期には「日書」を副葬することがなくなっていくが、「日書」自体が消滅したわけではなく、儒教の浸透や学校の設置、選挙制度の開始などにより、「日書」によって郷里の名望を集めるような価値観が失われていったことの現われではないかと思われる。